

た。翌年同劇場での「トロヴァトーレ」ルーナ伯爵でデビューしました。そして居を首都ローマに変え、オファーをまちましたが、ちょい役しかありませんで5年の歳月が流れました。

1967年やっとパルマから「運命の力」ドン・カルロのオファーがありました。この時の相手役テノールはフランコ・コレッリで大いに期待のかかった公演でした。又この時メトロポリタン歌劇場から新人発掘の任を受けていたロベルト・バウアーも来ていて、彼から賛辞の言葉をいただきました。そしてメトの総支配人ルドルフ・ビングのオーディションの手配をもしてくれました。ここから私の本格的なキャリアが始まったのであります。

しかし、彼は人生を振り返る。1950年～68年まで18年間はひどいものでした。随分一人で苦しみました。

これが私の性格に尾を引いたのです。警戒心が強く、無口で閉鎖的な人間になったのです。私を知らない人は私を尊大な人間、傲慢、気取っている。と言われました。だが、そうではないのです。私を完璧なまでに孤独にしたのは、この身に沁みついた苦悩なのです。と語る。

彼は苦み走った端正な顔立ちである。そこに穏やかなこの上なく深い人間味を讃えた目が光る。彼は今やバリトンの王者、ベルカントものを歌わせたら、彼の右に出る者はいない。圧倒的な美声、気品を保ちながらあらゆるニュアンスを表現しうる多彩な音色、ポルタメントの優雅さ、レガートの清らかさをもたらす滑らかな発声など、多くの美点を持っている歌手は近年他にはいない。パルマ市は彼を「ヴェルディの騎士」に選出した。

(参考文献「スカラ座の名歌手たち」レンツォ・アッレーグリ著小瀬村幸子訳 音楽之友社)

合唱について、

前作「ナブッコ」で<わが想いよ、金色の翼に乗って行け！>「イ・ロンバルディ」での<おお主よ、生まれ故郷の家から>は、祖国への哀愁、哀惜が詰まった美しくメランコリックな混声合唱であるが、「エルナーニ」第3幕で歌われる合唱<カステイーリャの獅子が目覚めんことを>は、がらっと雰囲気が変わり勇壮な男声合唱で、ユニゾンで唱われる。この力強い勇壮な合唱がイタリア人を奮い立たせ、リソルジメント運動の一役を担うがヴェルディにとっては、まさかの出来事であった。ヴェルディはここまでの自作品について合唱の効果を存分に発揮、妙味、美しさ、力強い勇壮さを表現<合唱の父>と呼ばれるようになる。

聖書と植物・・神が造られたミルト (mirto) =ミルトスについて